

# 英国における公的助成機関による OAポリシーへの対応に関する調査報告

---

2024年3月18日 「英国オープンアクセス政策対応等調査報告会」

東京大学附属図書館 尾城友視

神戸大学附属図書館 花崎佳代子

(国立大学図書館協会資料委員会オープンサイエンス小委員会タスクフォース)

# 主な内容

1. 出張概要
2. 英国のOAポリシー等
3. 各機関のポリシー
4. OA支援体制・組織
5. 論文の補足・登録・公開フロー
6. グリーンOA支援
7. ゴールドOA支援
8. ダイヤモンドOA支援
9. モノグラフのOA支援
10. 研究データ管理・公開支援
11. まとめ

# 出張概要

- 期間:2024年2月10、11日~18日(うち3~4日間は移動日)
- 訪問先機関:
  - Imperial College London
  - University College London
  - King's College London
  - University of Kent
  - Jisc
- 予算:国立大学図書館協会「ビジョン2025の推進にかかる予算措置」に申請

# 予算申請時の事業目的・趣旨〔2023年12月〕

- 日本において、「統合イノベーション戦略2023」により2025年度新規公募分からの学術論文等の即時オープンアクセスの実現に向け、国としての方針を策定することが示されるなど、公的助成を受けた研究成果のオープンアクセスの動きが加速している。
- 英国ではこれに先行する形で、2010年代から順次公的助成機関によるオープンアクセス義務化への対応を行っており、結果として論文のオープンアクセス率がこの数年で大幅に上昇している。そのため、英国の大学図書館および関係機関の対応や取組みを調査することは、日本の大学図書館の、より実効的なオープンアクセス推進支援策の構築に資すると考える。
- なお、英国におけるオープンアクセス義務化への対応については、[訪問者のうち一名が2016年に実施した調査](#)や、その後[2020年～2021年に米国大学図書館員が実施した調査](#)があるが、長期間にわたる対応の中で得られた知見や課題に関する最新情報を詳細に聞き取り会員館に共有することで、今後の日本におけるオープンアクセス推進に寄与することができる。

# 訪問先機関について

- OA率が高く、グリーンOAの割合が比較的高い大学を中心に選定(ライデンランキングを参考とした)
- OA支援ツールの開発・提供、英国大学の転換契約交渉等を行っているJisc
- 移動を考慮してロンドン中心となり、大学の性質があまりばらけなかったかも…

	THE 2024 *( )内は英国内	REF 2021 総合順位	REF 2021 研究力順位	ライデン 2023 OA率	ライデン 2023 グリーン率	学生数	教職員数	創立年 *大学として
Imperial	8 (3)	1	9	85.4%	29.3%	23,000	8,000	1907
UCL	22 (4)	6	2	90.5%	33.2%	51,000	16,000	1826
Kent	401-500 (50)	38	32	89.6%	44.6%	19,000	3,000	1965
King's	38 (6)	9	6	83.0%	25.2%	33,000	9,500	1829

# 英国大学における研究費の仕組み

## 競争的研究資金

- 個々の研究者がこれから行う研究計画に対する資金提供
- 主に英国政府(UKRI\*)と、その他の公益財団\*\*等による

\* 英国研究・イノベーション機構(UKRI)。ビジネス・エネルギー・産業戦略省(BEIS)の下に設置されている。cOAlition Sに設立当初から参加。

\*\* Wellcome Trust等の財団。

## 研究交付金 = REF評価による配分

- 各大学がこれまで行った研究実績に対する評価と資金提供
- 配分された資金の用途は大学が決める
- 英国政府(UKRI\*)による

# REF評価(研究卓越性評価)とは

- REF: Research Excellence Framework
- サッチャー政権下の1986年に導入された**大学評価**の仕組み
  - 実態として、学内における学部→**個々の教員評価**にも影響を及ぼす
- 概ね6年おきに実施
  - REF2021が終了(2022年5月に結果公表)
  - REF2029に向けた検討中(2028年秋に提出、2029年12月結果公表予定)
  - いったん決まった配分額は、次のREF評価まで基本的に固定

研究者にとっては当然嬉しい仕組みではない  
制度そのものに対する見方も賛否両論

# REF2021における評価方法

- 36の学問分野別の評価委員会によるピア・レビュー
- REF2021の評価事項
  - 大学の研究環境に対する評価:15%
  - 研究がもたらした社会的インパクトに関する事例説明の評価:25%
  - 研究成果の評価:60% →OAになっているもののみが評価対象
- 5段階評価により、上位2段階に該当する研究成果の数に応じて研究交付金額が決定する



# UKRIとREFのOA要件

## UKRI

- 雑誌論文・会議録論文
  - OA出版 または 著者最終稿/出版社版をリポジトリで即時公開(エンバーゴは認めない)
  - CC BYが原則、条件付きでCC BY-NDも可
- 単行本・章(2024年1月～)
  - 著者最終稿/出版社版を出版プラットフォーム、出版社ウェブサイト、リポジトリで公開
  - エンバーゴは12か月許容
  - CCライセンス

## REF2021

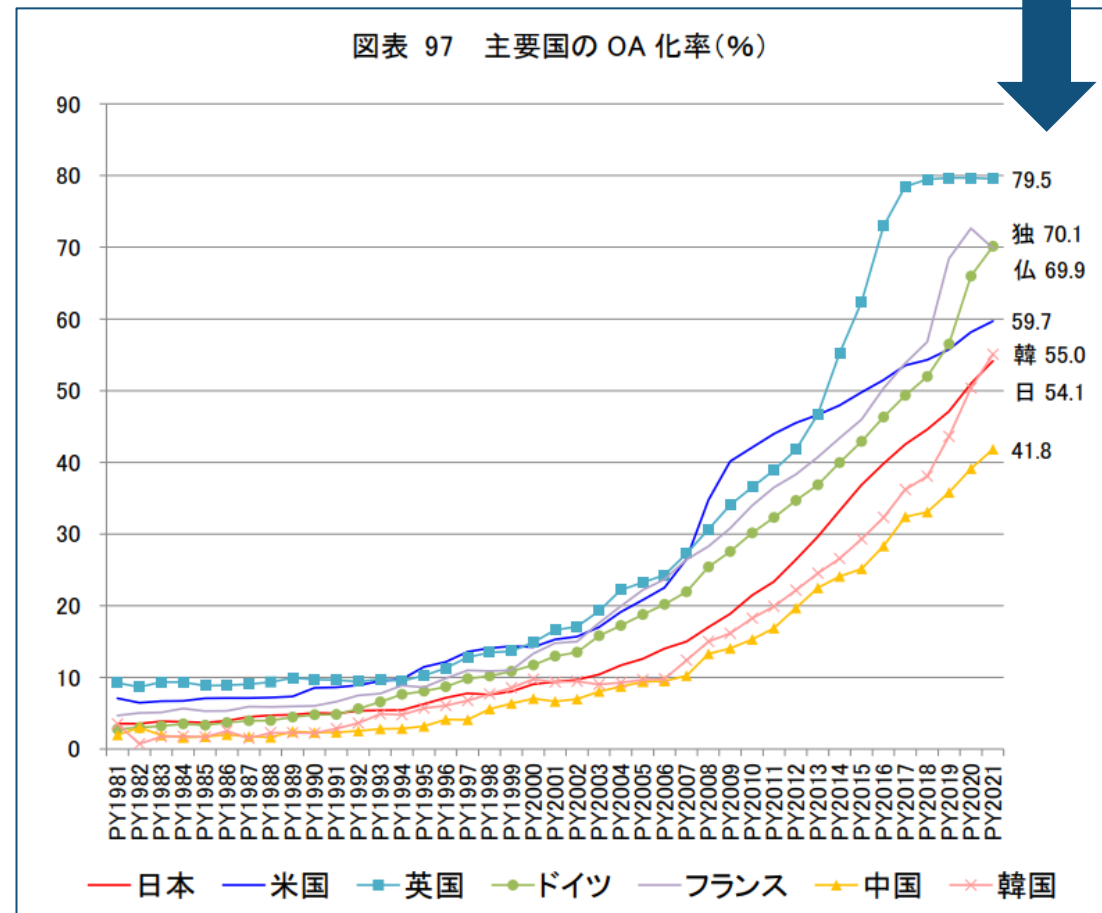
- 対象:雑誌論文と会議録論文
  - 受理後3か月以内にリポジトリに登録  
→公開(エンバーゴは上限付きで許容)
  - 著者最終稿が原則、出版社版も可
  - CC BY-NC-NDが最低ライン
  - プレプリント、ゴールドOAも条件を満たせば可
- ※ REF2029における詳細は未定のため、  
現在もREF2021に則った対応が継続中

# 英国のOA政策の様相

主要国間でOA化率トップは英国  
ただし2018年以降は横ばい

- 2012.7 フィンチレポートによりOA(主にゴールド)を指向
- 2013.4 英国研究評議会(RCUK)がOAを義務化(エンバーゴあり)
- 2014.3 REF2021のOAポリシーが公表
- 2021.8 UKRIがRCUKのOAポリシーを改訂→即時OA義務化

(出典)文部科学省科学技術・学術政策研究所, 科学研究のベンチマーキング 2023, 調査資料-329, 2023年8月.

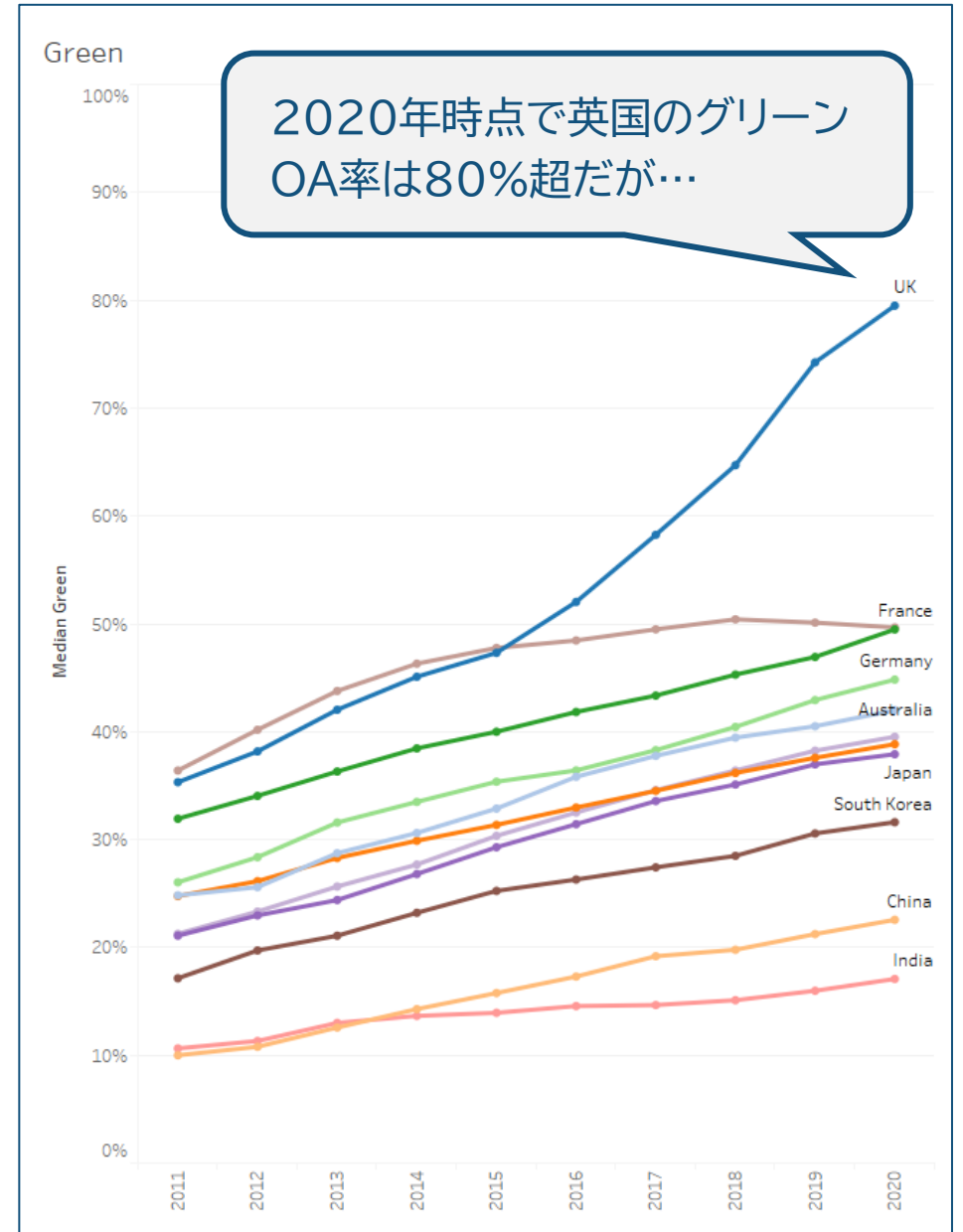


# 英国はグリーン大国？

- 転換契約の進展による変化を注視する必要がある
  - cf. Jiscとエルゼビアの3年間のOA契約(2020.3～)
- Jisc「グリーンとゴールド、特定の方向性があるわけではない。商業出版社が研究に果たす役割を認めつつ、公的資金からのAPCの支出増加や、OAを妨げるリスクを懸念する必要がある」
- UKRIは即時OAを要求しており、APC負担に対する財政的支援も行われている

The median institutional green open access percentage for each country according to the Leiden Ranking

(出典) Arthur Smith, Open access: fringe or mainstream?. Unlocking Research, 2020-10. <https://unlockingresearch-blog.lib.cam.ac.uk/?p=2879>.





以上の背景をふまえ、  
ここからが具体的な報告となります

# 大学のOAポリシー

- 全ての研究成果(の著者最終稿)を CRIS や 機関リポジトリ に登録することを求める【UCL、Kent、King' s】
  - 査読付き学術雑誌掲載論文と会議録論文のみに適用(他は推奨)【Imperial】
  - 実態としてはREFで求められる論文の捕捉に留まるという声もあった
  - OAポリシーではなく「研究出版ポリシー」に含める動きも見られた
- ポリシー遵守のインセンティブ
  - 昇進のための提出書類(研究実績)が機関リポジトリから出力される【Kent】
  - 研究者の公開プロフィールがCRISから出力される【UCL】
  - APC申請をCRIS経由で行う【Imperial】

「大学のポリシーでは研究者の行動は変わらない、変えたのはREF」



# 大学のOA支援体制・組織

- OA専任チーム体制 - UCLの場合: 総勢13名

- Head of Open Access Service: 1名
- リポジトリ担当チーム: 7名
- ゴールドOA担当チーム: 3名
- コンプライアンス担当チーム: 2名

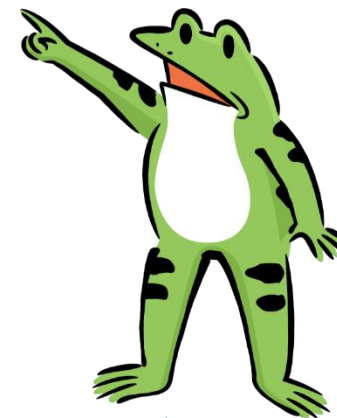
→ 増加

→ UKRI対応のために新設

- OA担当者 & 館内シェア体制 - Kentの場合: 2名 +  $\alpha$

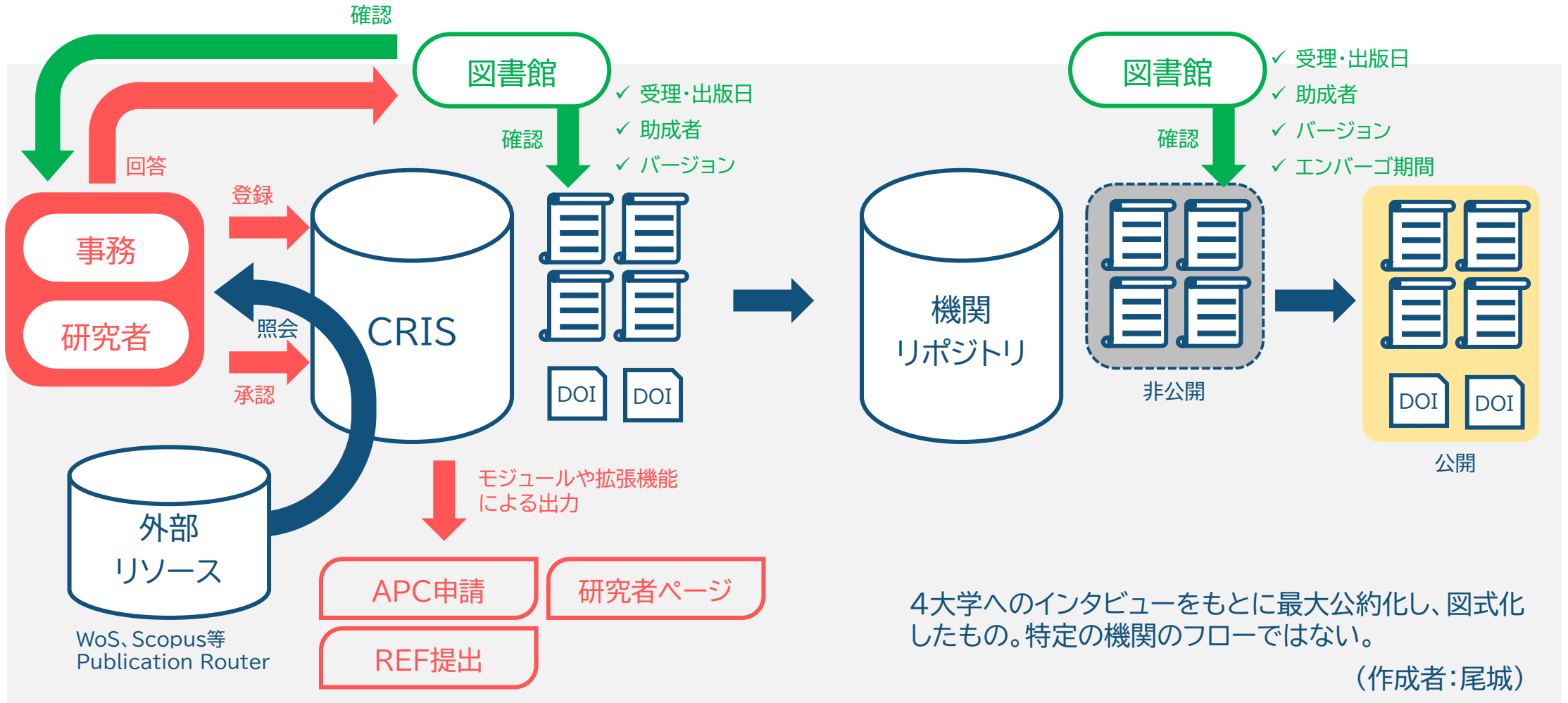
- Open Research Manager: 1名
- Open Research Officer: 1名
- 目録などの担当者ともOAに関する業務をシェア

いずれも図書館内の組織。  
グリーン/ゴールドを包括するOA  
支援のための組織やポジションが  
あることが印象的！



CRISを担当する研究支援・IR系の  
部署や、IT系の部署等と連携してい  
るとのこと。

# 成果物の捕捉から登録・公開のフロー(1)



# 成果物の捕捉から登録・公開のフロー(2)

- CRISと機関リポジトリの運用や使用するシステムは機関によって異なる
  - CRISと機関リポジトリを連携／両機能を兼ね揃えるPureを使用 etc.
  - 図書館がCRISも運用／CRISは専門部署が運用 etc.
- 早期に成果物を捕捉する必要性
  - 外部リソースによる後追いの出版情報ではREF要件を満たせない  
→研究者のセルフアーカイブを促進することが重要
  - CRISや機関リポジトリを研究者にとって「不可欠」なシステムとして組み込む  
→研究者はOAの理念に賛同してやっているわけではない？
  - 地道な広報・普及活動による認知度の向上



# 成果物の捕捉から登録・公開のフロー(3)

- OA要件の遵守状況のモニタリング
  - CRIS(Symplectic Elements、Pure)のREF用モジュールを使用
  - Unpaywallでリポジトリ登録状況を確認【UCL】
  - REF要件を満たす成果物の割合や登録可能な論文リストを学部へ送付【UCL】
- 図書館で網羅的なチェックや登録促進はしない機関も
  - 図書館はわかりやすいワークフローを作ることが重視
  - 研究スタッフとしての雇用契約にREF等の研究評価への参加が含まれる場合も
  - OA要件の遵守は研究者の責任

# 出版社のOAポリシーの確認

- リポジトリに登録可能なバージョンやエンバーゴの確認が必要
- 日本と課題は同じ = 1件ずつ確認する手間と時間
- 確認手段
  - Sherpa Romeo(最新情報がわからないのであくまで参考)
  - 出版社Webサイトを参照、記載がなければメールで問合せ
- この問題を解決し、グリーンで即時OA要件に対応する手段  
⇒ 権利保持戦略: Rights Retention Strategy

# 権利保持戦略

- 出版社に論文の著作権を譲渡等する前に、OAにするための利用許諾を所属機関や助成機関に対して著者が与えること、あるいは、助成機関が論文をCC BYなどで公開することを助成対象者に義務付けること(鈴木康平「30分でざっくり理解するオープンアクセスと著作権」@SPARC Japanセミナー2023)
- ハーバード大学(2008年2月)、Plan S(2020年7月)が先進的な事例
- Plan Sの権利保持戦略
  - 研究助成機関が被助成者に対して、出版後即時OA&研究成果へのCC BYライセンス付与を要求
  - 著者は投稿論文に、助成者の情報&CC BY付与の文言を含める
  - 出版社への著作権譲渡よりも優位
- 出版社の反発や研究者の混乱→大学での導入の動き

# 大学による権利保持戦略の導入

- 英国の27大学が導入済（2024年3月時点） ※英国の大学数は100程度
  - Imperial と King' s を含む
  - UCL と Kent は準備中
- 導入に必要なプロセス
  - 法務担当者と法的要件の確認 ※英国では出版者への事前通告が必要
  - 出版社リストの作成とレター送付
- 「権利保持の文言を原稿に含めるかは著者が選択できる」
- 「OAポリシーの確認を全件行う必要がなくなったので圧倒的に楽」
- 「先行機関と出版社の間で大きな問題が発生していないことが後押しとなる」

文言がなくてもポリシーは適用される

# JiscにおけるグリーンOA支援(1)

- Sherpa Romeo

- 出版社とジャーナルのOAポリシーを集約・提供するデータベース
- 特に著者によるセルフアーカイブに関する条件の参照ツールとなっている
- 2024年2月以降、書籍に関するOAポリシーの提供も開始

- 権利保持戦略の支援

- 権利保持戦略の導入について情報交換するためのグループを創設
- 導入済／未導入の機関がメンバーとなりベストプラクティスの共有などを行う

# JiscにおけるグリーンOA支援(2)

- 出版社との契約交渉における「Compliant Green」モデル
  - 転換契約の提案が難しい場合に、CCライセンスを含むグリーンOAオプションを交渉
  - Publication Routerへの参加が含まれるオプションも
- Publication Router
  - ジャーナルからCRISや機関リポジトリに、所属研究者の論文のメタデータや著者最終稿を提供する仲介システム
  - 参加する出版社、大学は増加傾向
  - 高機能のCRISを使用している大学では、あまり活用されていない印象
  - リポジトリやCRISとのシステム的な相性の問題もある

# ゴールドOA支援(助成機関)



UKRIは  
cOAlitions加盟

- OA対応のためのブロックグラントを助成
  - UKRI
    - APCも含め、UKRIのOAポリシー準拠を目的とした用途で幅広く使用可
    - ハイブリッドジャーナルのAPCには使用不可(Jisc承認の転換契約・転換雑誌は可)
    - 転換雑誌への助成は2024年末で終了(転換契約についても終了の可能性あり)
  - Wellcome Trust
    - フルOA誌のAPCに使用可(DOAJ収録, Europe PMCでの公開可等条件あり)
  - Cancer Research
  - British Heart Foundation

UKRIのグラントは人件費やインフラ整備も含め幅広く使用可  
使用条件を定めることで、公的資金の望ましい用途を提示

# ゴールドOA支援(Jisc)

- OA方針遵守のオプション対応を出版社と交渉(約400出版社)

R+P Model	過去のAPC／購読費をベースに、固定金額で所属機関研究者のAPCと購読権を得るモデル
PAR Model	過去のAPC額等をベースに、所属機関研究者が出版した論文のAPCを総額で払い、購読権も得るモデル
Pure Publish Model	固定金額で無制限にOA出版できる
S2Oモデル(Subscribe to Open)	現在の購読費をOA化費用に充てる 参加機関を募り基準額を満たせばOAに(満たさない場合も、参加機関に対しては割引や購読権等あり)
Other Contribution/Collective Funding Models	サポート費、会員費などで資金をあつめてOA出版。
Compliant Green	エンバーゴなしのAAMのグリーンOAを認めていればOK。Publications Routerの使用も含めて交渉
Flipping to OA	フルOAにする
Transformative Journal	ハイブリッドでも一定の基準(cOAlitionsの基準＝年間5%OAコンテンツ増加&75%に達した時はOA誌に)+Jisc独自の基準



# ゴールドOA支援(Jisc)

様々な規模の研究機関の  
メンバーが参加  
助成機関、関連団体  
(SCONUL・RLUK等)からも  
参加

- 転換契約の交渉（契約数38 2024.1）
  - 交渉チーム
    - UUK and Jisc content negotiation strategy group
      - 大学上層部中心 交渉に関する戦略策定 政府との伝達役
    - Content Expert Group
      - 大学図書館員中心 戦略を個々の交渉レベルへ反映 上記グループとの伝達役
  - 参加する全機関がメリットを得られる契約を目標にしている
  - 出版社からの提案 ⇔ 参加機関のコンサルテーション  
(例)Springer Natureの事例
  - 契約によるが1~2年かかることも

# ゴールドOA支援(Jisc)

- 転換契約に関する評価・検討
  - 2018 転換契約の要件を制定・随時更新
    - コストの抑制
    - 選択可能なOAオプションの提示
    - 世界レベルでのOAへの貢献
    - 透明性の向上＝価格設定に関する情報提供
    - 簡易性・効率性向上(例:ORCID、DOI、CC BY)
    - オープンな研究の慣行を導入(例:FAIR原則)
  - Transitional agreements oversight group(2021-)中心
  - JCS(Journal Comparison Service)への情報提供依頼

- 各雑誌の提供するサービスや価格情報を集約し比較可能とするためのサービス
- cOAlitionSが提供

# ゴールドOA支援(Jisc)

## 転換契約に関するレビュー(2024.3公開)

- 英国・世界における、約10年の影響を評価
    - OA率、OA方法の内訳(英国／世界)
    - 英国でのコスト面
    - 助成機関OA方針準拠
    - 転換契約の転換の状況
- 増加(ゴールド・ハイブリッド増・グリーン減)  
削減効果あり  
概ね準拠(UKRI)  
一部のみ

- 出版社による価格情報の透明性の不足、転換契約のための事務作業増加という課題も。
- 今後、出版社の公正性に関する指標についても要検討。

# ゴールドOA支援(Jisc)

- 転換契約・転換雑誌情報を[JCT\(Journal Checker Tool\)](#)へ提供
- APCのレポーティングに関する支援
  - Monitor Open
    - OAのモニタリングとレポートティングができるシステム
    - OA switchboardの連携も含め検討を進めていた
    - 試行の結果、各機関の既存システムとの連携が困難のため中止
  - 助成機関への報告作業に必要なメタデータ項目を定義したデータモデルの整備

## OA switchboard

- 助成機関・研究機関・出版社間でOA論文に関する情報(APCの情報等)をやりとりできるサービス

# ゴールドOA支援(各機関)

- 転換契約は基本的にJisc経由で契約
- 転換契約交渉のための情報収集・Jiscの調査への対応
- 学内APCファンドの創設
- APC助成の申請管理・助成機関への報告
  - 独自のAPC管理システム(ICL)
- それ以外のAPCの把握(ICL)

- OA論文の出版実績・1件あたりのAPC
- 購読側の利用実績・PPV
- 契約しない場合との比較
- 権利保持戦略の利用可否

→ 契約から利益を得られるか判断

# ゴールドOA支援(各機関)

- 研究者のための転換契約情報の整備・周知
  - [SciFree](#)を利用した[転換契約ウェブページ](#)整備(ICL)
  - [Read and Publish journal search](#)(Kent)
  - 各助成機関のOA方針準拠のための案内ツール [Check before you choose](#) (Kent)
  - 転換契約があるが非OAの著者へはコンタクト(King 's)

# ダイヤモンドOA支援

- Jisc
  - OACF(Open Access Community Framework 2022-)
    - ダイヤモンドOAの小御規模出版社等へJisc参加機関が出資できる枠組み
  - DIAMAS等について情報収集中
- 各機関
  - UCL Press (UCL)
  - 図書館でOJS(Open Journal System)のプラットフォーム提供(Kent)
  - 大学出版社のOA出版のコミュニティへの出資(Kent)

# モノグラフのOA支援

UKRI  
2024.1-出版のモノグラフ（章  
含む）の著者最終稿か出版社  
版を、出版後12か月以内にOA  
にすることを義務化

- 助成機関
  - 雑誌論文用のブロックグラントと別に助成枠あり(要申請)
- Jisc
  - Open Access for Books: 図書のOAポリシー情報。今後も追加予定
- 各機関
  - UKRI義務化に関する情報提供・グラント申請の受付や管理
  - 各大学の研究分野により相違



# 研究データ管理・ 公開支援

UKRI

- 7つあるカウンシルごとにデータポリシーがあるが、原則として可能な範囲でオープンに
- DAS (Data Access Statement)を論文に含めることを義務付け

- Jisc

- [Research data management toolkit](#)の提供
- 助成機関データポリシーを満たすデータリポジトリ調達の要件定義
- プラットフォーム[Octopus](#)の開発＝新たな研究成果公開方法の提唱

- 各機関

- データポリシーや機関のデータリポジトリを整備
- ただし基本的には、分野別リポジトリや助成機関が定めるリポジトリを推奨 ⇒ 登録先リポジトリの情報提供
- DAS(Data Access Statement)、DMP等に関する情報提供やガイダンス
- [DMP Online](#)をカスタマイズ(案内・テンプレート掲載)(Kent)

# まとめ:OA進展の要因

- REF

- 教員の評価や研究助成額に直接かかわるため強制力大
- 図書館が網羅的チェック・登録依頼しない機関もあり(教員の責任)
- 図書館以外の部局や学部の協力も得やすい

- 資金源

- UKRIによるブロックグラントがAPCの主な資金源となり、そのほか人件費、インフラ整備等にも使用されている
- 学内でAPCファンドを創設している場合もあり

# まとめ:OA進展の要因

- グリーン/ゴールドOAの包括的対応
  - 出版社がいずれかの方法で即時OAに対応するようJiscを通じ交渉
  - 図書館内ではグリーン/ゴールドOAを含む専門部署を整備
- シンプルなワークフロー
  - 研究者は研究成果情報をCRISやリポジトリに1度入力
- ステークホルダー間のコミュニケーション
  - Jiscを中心にした、助成機関、出版社、研究機関の相互コミュニケーションとフィードバックのサイクル

# まとめ：英国での課題

- 転換契約はOA論文増加に役立ったが、APC費用の増額や、転換契約がOAに転換しないことは課題
- グリーンOA(権利保持戦略)・ダイヤモンドOAによる影響は今後注視
- 投稿先に関する研究者の選択の自由や、学術情報流通の持続性・公正性を重視

# 各機関でできること

- 学内研究者の出版状況・APC支払状況の把握方法構築
- リポジトリ担当・転換契約担当間での情報共有
- 研究推進部門/IT部門/図書館の学内連携
- 教員の負担を最小化するシンプルなワークフロー構築の検討
  - 外部情報源を利用した登録支援機能
  - CRISとリポジトリの連携

# 要望

- OA義務化に関する詳細の明確化
  - 即時の定義(出版日に公開／出版後すぐ登録手続き？)
  - 義務化の度合(例外の場合の対応／罰則)
  - モニタリング(誰がいつどのように実施？)
- APC・人件費・インフラ等に使用できる継続的/柔軟な資金助成
- 即時OA実現のための出版社との交渉
- ステークホルダー間のコミュニケーション

参考)

[Shaping our open access policy\(UKRI\)](#)  
[UKRI Open Access Policy Stakeholder Forum](#)

ご清聴ありがとうございました



みなさんのご意見も  
ぜひお聞かせください！